



北方探検の先駆者 最上徳内物語



宝暦^{ほうれき}5年（1755年）最上徳内は出羽国村山郡楯岡村（現在の村山市楯岡新町）の貧しい農家の子として生まれた。

名前は元吉^{げんきち}と名づけられた。



元吉は「いつかりっぱな侍^{さむらい}になるんだ」と働きながらいつも一生懸命勉強をしていた。



27才の時に夢がかない江戸にでた元吉は幕府の医師山田宗俊^{やまだそうしゅん}のけらいになり、のちに本田利明^{ほんだとしあき}の音羽塾^{おとわじゅく}にはいり天文学や医学、測量学を一生懸命学んだ。



元吉は日頃の勉強熱心が認められて幕府の
たぬまおきつぐ
田沼意次にえぞ地（現在の北海道）調査を
命ぜられた。
これを機会に名前を「**最上徳内**」に改めた。



えぞ地での徳内はとても仕事熱心だった。
そのことは後の著書「えぞ草紙」を書いた時
にとっても役にたった。



当時としては徳内はとても進歩的だった。
いつも世界に目を向けなければならないと訴
えていた。
そして9回もえぞ地を調査することになった。



てんめい
天明8年（1786年）徳内はあつけし
厚岸を訪れアイ
ヌのしゅう長イコトイの案内でくなしり
国後、エトロフ
を調査し、ついにウルップ島に日本人として初
めて足をふみ入れた。



寛政10年（1798年）近藤重蔵らとともにエトロフ島に渡り「大日本恵登呂府」の標柱をたて日本の領土であることを明らかにした。



徳内が56才の秋に大奥の庶務係に昇進し、海防計画を立案する。全国をまわりその知識をおおいに発揮して数々の名著をのこした。中でも「えぞ草紙」はとてもすばらしい本だった。



徳内は72才の時に偉大なる学者シーボルトと交友を重ね、その知識の豊かさにシーボルトは「18世紀の最もすばらしい日本の探検家」とほめた。そして徳内の書いた「北方地図」、「アイヌ語の研究」が西洋に紹介された後に高い評価をうけることになった。

